声明

'70 7/11 日本共産主義学生同盟東京教育大学支部支部員有志
（「赤焔」派いう所の「新左翼派」）

心からの連帯につながれたる教育大の戦闘的学友諸君！ 我々は去る6月23日、明治公園で展開された我々と「赤焔」派、共産同赤焔派（以下、赤焔派として一括して表記する）との激烈な党派闘争に関して諸君の注意を喚起したい。我々は23日党派闘争がとった激越な形態の中に、その本来の意義が見失われることを好まない。ましてや23日以降、当の赤焔派や一部他党派によって、この党派闘争総体を歪曲するところの低劣なデマ・中傷がなされていることを聞きのがすわけにはゆかない。故に我々は23日、更にはこの間展開されている我々と赤焔派との党派闘争について正当な理解をかちとられることを要請して、声明という形で諸君に訴えるものである。

それに当って先ず我々は、この間赤焔派が一貫してこの党派闘争の事実を諸君の前から隠蔽してきているということを強く弾劾せねばならない。このことこそは彼等の思想的、政治的腐敗を物語るもの以外の何ものでもない。赤焔派がいかに現時の党派闘争を過去の事実（一方の"除名処分"もその一つ）に帰着させることに骨折ろうとも、社学同―共学同運動の分裂と対立という事実は共産主義運動の流れの中にひとつの「安定性をもって存在するのだ。

我々は赤焔派のこのような思想的な対応を粉砕し、この党派闘争を担う学友諸君の前に公然化させ、諸君とともにこの止揚へ向けて前進する決意である。この党派闘争が、60年代階級闘争「新左翼運動の意義と限界を積極的に表現するものであり、且つ、その突破の可能性を内在させていることを確信するからである。■

（1）

まず始に我々は、6月23日、明治公園において赤焔派部隊を完膚なきまで粉砕し去ったことを確認する。この日、この党派闘争の直接的原因となった赤焔派よりの「最後通牒」（このことについては後出）を断乎粉砕する決意に燃えた労働者、学生、高校生五〇の部隊は固く隊伍を組んで会場にその勇姿を現わした。「赤焔粉砕！闘争勝利！」のシュプレヒコールも高らかに会場内デモンストレーションを行った後、前方演壇近く陣取っていた赤焔派部隊へ肉迫した。それに対して赤焔派は何ら対応することもできず、一目散に逃げ出した。逃げ遅れた部分も我々の鋭い攻撃の前に総崩れとなり、必死にまわりの他部隊の中に逃げこんでいったのである。大衆の面前におけるこの彼等の無様な潰走ぶりについて今改めて言うこともないであろう。

ただこの過程で遺憾なことには赤焔派に隣り合って結集していた教育大全学闘と学生解放戦線の諸君のうち若干名をこの衝突の中に巻きこんでしまったのである。我々は両組織の学友に対して70年代階級闘争をともに闘い抜くに当っての同志的連帯を感じていこそすれ、何らの敵意もいだくものではない。教育大全学闘、学生解放戦線の若干の学友に対して深く陳謝したい。

さてその後我々は会場において23日党派闘争を勝利的に闘い抜いたことを確認すべく集会をもっていった。その席になって彼等は必死に人数をかき集め、全くの復讐的意図によって突如襲撃をかけてきたわけである。しかし彼等の寄せ集めの人数をもってして、我々を圧倒することなどできるハズもなく、我々の反撃を受けてわずか30秒足らずで粉砕され算を乱して逃走していったのである。彼らが無事に逃走できたのは、我々の追撃がベ平連系の市民主義者によって阻止されたからだということを付け加えておこう。

かくして対赤焔派党派闘争を完全に勝利した我々は、「両部地区共闘」の大衆部隊を加え、総勢一〇〇の隊列を形成し、東大全共闘とともに終始一貫して権力へ向けた攻撃的デモンストレーションを貫徹して我々の政治的登場を圧倒的にかちとった。

言うまでもなく我々と赤焔派との党派闘争は6・23にのみ集約されるものではない。その徴候は先日7・7集会においても現れているのであり（後述）、この党派闘争の発端たる赤焔派最後通告が彼らによって撤回されるまで続けられるであろう。次にこの発端について語らなくてはいけない。

（2）

赤焔派の最後通牒とは正式には「社会主義労働者同盟中央委員会」なる団体（赤焔派のこと）より我々に突きつけられた『新左翼派』に対する自己批判要求書」という文書のことである。彼らはそこで五項目の自己批判要求（実質的には四項目）を出し、"これに○日までに回答せよ。この要求（四項目）に応じない時にはいかなる手段をもってしても諸君を追求する"等といって来たのである。四項目の内容は「新左翼」45号についてのことなのであるが、その結論は、45号を出すことを実質的に推進した政治フラクションを解散せよというものであるのだ。このことは即ち反対派としての我々の政治的結集を解けということであり、我々に対する全面的敵対の表明に他ならない。我々はこれを我々の組織破壊の恐意の表明として受けとらざるをえなかった。そして我々はこのような傍若無人な挑戦に対して我々自体を防衛しなくてはいけないことを了解したのである。我々は直ちにこのような最後通牒に回答することはできないということ、そして赤焔派にこの最後通牒の撤回を要求し、必らずそれを実現させなくてはならないということを確認した。又予想されうる赤焔派の我々（というよりは我々個々）に対する謀略的な弾圧に対してもそれを断乎として許さない（残念ながらそれまでは許してきてしまったのだが）ことを確認した。

この確認の下に23日、我々は赤焔派に向けて最後通牒に対する革命的な黙殺の態度を我々の力をもって表現し、彼らのセクト的野望を粉砕することとしたのである。ところが彼らは自らのセクト的擁護ないしこの我々の行動に備えることもできず、最後通牒を宙に浮かせたまゝ逃走したことはまことに笑うべきことである。最後通牒における彼らの立場からすれば、解散さるべき政治フラクションが部隊を作って公然と登場することは断乎として粉砕しなくてはいけないことなのだ。ところが事実はその反対となってしまったのだ。このことこそは、彼らの政治フラクション解体要求自体がいかに彼らの主観的願望にすぎなくなっているのかを有弁に物語っているのだ。

（3）

ところで学友諸君！

この党派闘争に内容的に対応しえぬ赤焔派は極めて悪ラツなデマゴギーを流して、この党派闘争自体を歪め、その真の意味を諸君の前から隠蔽しようと狂奔しているようである。

その最たるものはこの間の事態のそもそもの発端たる最後通牒自体をひたすら隠し通そうと躍起になり、どうしてもそのことに触れざるをえなくなると、「あれは最後通牒ではなくて、単に事務処理のつもりだった」等とほざいていることである。我々はこういう子供じみたいいのがれにあきれてあいた口がふさがらないというものだ。何日までに応ぜよ！さもなくば……という文書が最後通牒でないといわれて納得するバカがこの世の中にいるであろうか？人に匕首を突きつけられて、これは事務処理のためです」といわれて安心するオメデタイ人間がどこにいるだろうか？

万が一、赤焔派が我々に完全敵対することをあきらめているのなら、彼らはすみやかに最後通牒を撤回すればよいのだ。そうではないなら、彼らは妙ないいのがれ等やめて彼らの「中央委員会」へ集中したらよいであろう（もっとも「中央委員会」名の最後通牒がどれ程ど彼らの組織の中で確認されているのか、その辺の彼らの規律は非常に怪しいものだが）。

我々は彼らとのこのような低劣な次元で対応するほどのヒマも階級からは与えられてはいないのだ。この党派闘争として表現された内容をこそ大衆的に公然化し、止揚していかなくてはならないのだ。

（4）

秋期決戦と新左翼運動の敗北は日本変革派の自己超克をめざし60年代後半の階級闘争に身を投じて来た我々に対して、極めて深刻な理論的、組織的総括を要請した。ところが、この時期に応えるべく開始された社学同―共学同内総括論争の中に極めて濃厚な経済主義的傾向が発生し、同盟路線の歪曲、全面否定をもって総括にかえようとするに至った。これらの同盟路線を清算した一部同志諸君はその清算を更に推し進め、純化していった。かくして彼等はマルクス主義における経済決定論的立場に辿りつき、そこに安住することとなった。ここにおいて我々と赤焔派との対立は路線云々をこえてさらに深いものとなった。「史的な階級＝人間の社会意識の目的意識性としての革命行為」をのヘゲモニイ装置としての党というマルクス主義のレベルは、彼らにとって拒否すべきものとなったのである。彼らは経済分析と階級を「物象化論」でつなぐことによって、又しても「左」翼経済主義のおきまりの一典型を作り上げつゝある。悪しき政治主義と、その具現物としての党の絶対性。彼らの小道具はますます揃いつゝある。我々はこのような経済主義的マルクス主義を粉砕し、マルクス主義における「党主義的立場を復興させていくであろう。

このような彼らの経済主義的立場は当然のことに彼らの組織観にも貫徹した。「階級」の名をかりたところの党の破壊、これが彼らの行ったところのすべてである。彼らは同盟内における論争を圧殺し、同志の「排除」によって結着をつけたのである。我々は終始一貫、論争の正当な発展、その止揚に向けて尽力した。（今、彼らは正にその反対のことをイケシャアノくと述べて

年余としているのであるが、それ
ことは自らの8中全「クーデター
が敗北を自我したことをおい隠
すためのご大歌舞であるのだこと
もかかわらず彼らがこのような等
に出たことは、革命的な左翼が
革的現象に優もするという彼らの
認者の結末を表わすものである。
彼らの経済主義的マルクス主義は
党組織においては苦しい主観主
義となり、党は客観化されないま
す、官僚主義的傾斜を強めざるを
えない。我々はこの国赤旗派がと
ってきた一連の組織におけるアナーキ
でム的所業を清算すると同時に
それをなさしめた彼等の主観主義
的組織観の破産を予言しておこう。
我々はこの国際の悲惨を主体的に
うけとめ、その克服を理論的にも
マ現実の組織の中においても推し
進めていくであろう。

ともかく、我々日和見主義結成
に端を発した右翼同一共産国際
を国際自身の利益として、我々の
自己確信の過程に引きつけ、想起
内民主主義を旗印とした敵との
討論の公然化の中にこそ止揚せ
んとした。マニュをば、60年代新
左翼運動の展開を理論的・実践的
に突破し、70年代階級闘争を担う
不抜の革命党建設の推力としてか
ちとろうとしてきた。しかし赤旗
派はこの苦しくも困難な作業から
脱落し、自らの全く新たな自己足
立人と走ったのである（赤旗派が
いかなる着地をかちげようとも、
その中味は自らの過去の全否定の
上に立った経済主義的マルクス主
義へののり移りである）。この他
発はすでにして彼らの下失性の様
表となっているということを彼ら
ほやがて気付かなくてはならなく
なるであろう。すでに彼らの最近
の過程は始っているよに、自己理解
的にも何ものかを提出したとい
とを聞かない。たゞ我々に対して
最後通牒を突きつける等七クト的

策効はたくましくしているのであ
る。我々はすでにそのような意図
には屈しないということを示した
し、このセクト的策動が彼らの過
さの表現でないことも重々知り抜
いている。我々は最後通牒撤回を
要求することによって更に彼らを
追いつめてゆくであろう。

(5)

最後にロ・ソ不可侵条約30周年、
日帝のアジア侵略開始40年九
集会における事実についてまと
つけ加える。

我々が6・23国会に引きつづ
ワ・ワ、50名の隊列をもって日比
谷野音に登場し、入管体制粉砕の
闘いの中から帝国主義・ソ連スタ
ーリニートと後抑圧人民との敵国的
連帯を具体として形成していく決
意を大衆的に明らかにするとと
もに、赤旗派に対する決別宣言を
23日に引きつづいて勝利的に闘い
とったことをまず報告しておきた
い。

我々はヴァルタ会談、日ソ華
協力等、日ソ華レ協力等、更には
日ソ華レ三国協力体制人、
と急速に展開する日帝の反共アジ
ア政策が70年代日帝のアジア侵略
の地歩を固めるものであることを
見ている。すでに65年日ソ華レ
条約により日帝はアジア侵略の
歩を固めてきたのであり、今、我
々は日帝の本格的なアジア侵略の
現代的内容に立っているというの
が実感である。日米共同声明、70
年日体はそのことをハッキリと示
した。この時代にあっては帝国主
義国プロレタリアートと被抑圧人
民との固い連帯こそが唯一侵略を
粉砕する保証となってくる。レか
レ一方、帝国主義ブルジョワジー
は排外主義イデオロギーを鼓吹す
ることによって両者の必死の分断
をはかってくる。彼らは両者の連
帯の内に自らの没落が用意されて

いることをよく知っているからで
ある。彼らはあらゆる手段、制度
を動員して、日本プロレタリアー
トとアジア人民を分断しようとし
てきている。入管体制の再編はそ
の最たるものである。予定されて
いる入管法改悪によって在日外国人を
司法警察の裏のきに監視し即
する体制が整えられるのだ。「自
由裁量」の名の下におびえる被
抑もない弾制。新たに日本人に対
する弾圧を準備。我々は70年代
日帝の支配に真向うから対決する
闘いとして入管体制粉砕の闘いを
推進する決意である。

この闘いにおいてもうひとつ急
速におかなくてはいけないことは
新帰入旅券法によってこの国を
断することはできないということ
である。ソ・ソ集会準備過程にお
ける多くの混乱と対立、華青闘問題
君の退場、中核派の差別会言等の
問題は平面にいって八派政治
それ自体すでに70年安保闘争の敗
北の中に客観的には破産して来た
のであるが――とうまで地点に追
められてきた大衆運動とのアソレ
キであったのだ。我々は他全代の
運動において真に大衆的エネルギ
をくみ上げなくてはならない。
そのために我々は過去の形骸な
一切断絶され、現在の階級闘争
の連帯に自らの運動構造を適応さ
せなくてはならないのだ。

ところで、当日赤旗派との敵対
闘争はさることながら、赤旗
派はもとより定らずの組織人が実
行政治ストライキの敗北を糊塗するための努力を
ことができなかったのである。彼
らの敵派性言（当日の党派が党
派としてできなかったのである）に
いても、我々自身がその敵対無
内容性をそのことがらい、我々
の断平とした運動の前にのずか
秒で降参せざるをえなくなり、
の敗北宣派としての位置を明確に

要求しまったのである。集会終了
後のデモにおいても彼らは我々な
ら姿をかくして広場から抜け出し
ていったのである。この事態こそ
は彼らの「政治ストライキ闘争」
要求というものがすべて空想像
の産物となって来ていることを
示している。我々は23日につづく
この勝利に力をえて、更に最後通
牒撤回へ向けて突き進むであろう。

(6)

すべての被国的学友諸君！

我々は自らを唯一無二の絶対的
自任であると等とは考えていない。
理論と組織が現実の一連の試練に
よって検証されることを通じての
み、何が革命的裏であるかが明き
らかにされるのである。我々はこ
の確認の上に70年代階級闘争を担
い切る革命党建設の過程を踏みし
めるべく、理論作業と実践活動と
を、組織的規律の形成のうちに開
始している。我々は唯一左翼同一
共産国際運動の内実を継承するもの
であり、その故にその敗北を革命
的に突破していく決意である。

対赤旗派敵対国家については、
この敵派国家においても我々は
の排外を突破して立ったのであると
いうこと、故に基本的に我々の姿
勢は攻仕的であるということをい
っておこう。我々は彼らが最後通
牒を撤回しない限りこの攻仕体制
をとくわけにはゆかない。ともか
く我々の行動を決するものは赤旗
派の対応であるということを付言
しておこう。

最後にこの組上を借りて、赤旗
派八三度彼らのいう「自己批判書
求書」の撤回を求めよう。

我々に対する「新左翼派」へ
の自己批判要求書を即時撤回し、
その旨、文書によって明らかにせ
よ！

以 上

学友諸君、去る6月23日、我々と赤旗派国学が外三者による敵対大
集会の若干の学友入被害を与えたという事実が存在する。このこ
とについて我々はすでに諸文書においてふれ、陳謝の意を表して来
たにその内一回目ソ・ソ集会に動員したアッピールの中でなので、
当日結集された学友各自にされていることと思う。上記声明の中
においてもその事実をしているわけであるが、被害を受けられた学
友に正式に自己批判するため、左記の自己批判書を明らかにして
おく。

6・23の事態についての自己批判書

去る6月23日、我々と赤旗派とが日比谷公園において党派闘争を展
開した際、我々なことに我々の不注意があって、赤旗派部隊に隣接
して結集していた敵対大学同の部隊の中の若干の諸君をこの衝突
の中に巻きこんでしまい、被害を与えてしまったことを自己批判し、
その諸君に対して深く陳謝します。

一九七〇年 七月 一〇日

被害を受けられた学友各位

赤旗派という ところの「新左翼派」

以 上

※この事態は我々と赤旗派との双方が責任を負うべきものであり、
赤旗派もまた自己批判を明らかにして然るべきである。

※現在、N君より我々に「申し入れ」が伝えられてきているが、我
々としてはN君自身が、我々の当の相手である赤旗派のメンバー
であるということから、この「申し入れ」にきわめて当惑せざる
をえない。そもそも党派闘争の相手へしかも敗北した相手）から
この種の「申し入れ」が伝えられるということがありうるのであ
ろうか。勿論、我々は被害を受けられた学友には謝意を表したい
と思っている。だからこそこのような形で「申し入れ」がなされ
ることに当惑するのである。